KUDAN PROJECT 上演台本

『くだんの件』

作：天野天街

【登場人物】

ヒトシ

タロウ

『くだんの件』　作：天野天街

0

いきなり♪〈JOASNNA NO.3〉C・I、灯C・O。セリフが始まると同時にP〈同ポジ〉

真夜中の柱に掛かる時計くるくると高速度で回り、その下の日めくりカレンダア、風にさらわれるようにパラパラ舞っていく。障子のムコウの窓の外は雲がブッ飛び、真っ赤になり真暗になり、また明るくなり雲がブッ飛ぶという高速の繰り返し。障子はものすごイキオイで閉じたり開いたりし、雪は降るは、机は燃えるは、花は咲くは散るは枯れるは閉じるは、各所でケムリがたなびくは、の騒ぎ

ヒトシ　「まず、ピサの斜塔が倒壊した。暴風雨は荒れ狂い欧羅巴全土をなぎはらう。亜米利加大陸は極端な気温の上昇を見、寒暖計は爆発し、ありとあらゆる樹木が南米の密林の如く天をしのいで大陸中を覆い尽くす。太平洋海底大鳴動、地盤隆起、西海岸、日本列島大津波で水没。揚子江大泥海となり中国南西部は泥の海。ヒマラヤ山系の新火山大爆発し、印度、阿弗利加大陸では夏だというのに大寒波、猛吹雪、全てが凍結。ロシア、オセアニア、南極大陸では大激震、断裂した地中より毒瓦斯大発生。さらに天然痘が復活し蔓延、さらに新種の悪性ウィルスが猛威をふるう。…その猛火激浪、流行病は全人類を漂蕩浮沈せしめ、悶絶狂死の極限に陥没せしむ。正に人類的大破壊と天然的大壊滅との呼応合致するところ、質に於いても量に於いても空前にして絶後 なる惨禍なり。ただし、オレンチのぞいては…。

パッと灯り点き音楽やむ。舞台は障子をのぞいて全体にのっぺりと白い。『コ』の字の囲いの中に居るヒトシ

ヒトシ　「だとイイなァ…。

かんでいたガムを包み紙にしまう

遠い目をしている。遠くからしきりに昼の蝉の声

ヒトシ　「ふぁ～。

ツメをポチンポチンと切る。切ったツメをくんくん嗅いでは脇のコップに入れている。退屈そう。低い塀のようなシキリのムコウを上手よりカオだけ出してゆっくりタロウ出てくる。ヒトシ、時々ツメを遠くに飛ばしてしまうフリ。タロウ、塀際を腰をかがめて伝うように、這うようにして進む。ヒトシの飛ばしたツメを拾ってニオイを嗅いでみる。声を立てずに大ゲサに顔をしかめ、また真顔に戻り、ツメを拾った場所に律儀に置いて、ゆっくり正面まで這う。ハンケチで額の汗を拭きながら…非常に暑そう。

ヒトシ　「(大声で) いらっしゃいませ、なんにいたします。

タロウ、ビクッと立ち上がり

タロウ　「ご、ごめんください、ツメの入ってないコップ。

しばしの間…蝉の声…

タロウ　「…暑いですねえ…。
ヒトシ　「なつ…なんでしょうねえ…。
二人　「…。

タロウ、露骨に首を伸ばして色々なトコロをながめて

タロウ　「…ここ…お店やさん？
ヒトシ　「そうですよ、ウラシマさん。
タロウ　「…なにうってんです？
ヒトシ　「タイムマシーン。
タロウ　「…へ？
ヒトシ　「タイムマッシーン。
タロウ　「…ハハ…ハハハハ…。
ヒトシ　「…ハハハハ…。

しばしの間

タロウ　「…暑い…です…ねえ。
ヒトシ　「なつ…なんでしょうねえ。
タロウ　「あ、あの、あたくしこーゆーもんで…。

と胸ポケットより名刺を出す。同時にヒトシ、セロテープをびびびと伸ばす。タロウ、自分の出した名刺をセロテープを交互に何度もみて、しばしためらったのち、名刺を真二ツにびりびりやぶく。スカサズ、セロテープで貼り合わせるヒトシ。それからその名刺をみて（図一）

ヒトシ　「…よみにくい…実に読みにくい名刺だ…。

タロウ、それをみて

タロウ　「貼り合わせ方が…逆です…それ…。

名刺を折り曲げて

ヒトシ　「…こうか…こうですね。

とタロウに見せて

タロウ　「はい。
ヒトシ　「…ウ・ラ・シ・マ…ウラシマ…タロウ…さん？
タロウ　「そうです。
ヒトシ　「…ウラシマさん！
タロウ　「な、なんです。
ヒトシ　「この名刺…立ちますよ…。

とテーブルの上に立てる

タロウ　「…そりゃあよかった…（少しイラつく）
ヒトシ　「アナタ…最近カメ助けたでしょ。
タロウ　「いいえ…ハハ…よく、な、なまえでからかわれるんですよね…ハハハ…。
ヒトシ　「それ…。

タロウの持つフロシキ包みを指して

ヒトシ　「…玉手箱？

タロウ　「ちがいます（素になって）
ヒトシ　「竜宮城、タノシかった？
タロウ　「そんなことしりません！
ヒトシ　「乙姫様キレイだったでしょ。
タロウ　「…。
ヒトシ　「あれ？ミノと釣ざおは？
タロウ　「釣りはキライだ！
ヒトシ　「あ、おこった。
タロウ　「おこってない。
ヒトシ　「おこってる。
タロウ　「おこってない。
ヒトシ　「おこってる。
タロウ　「おこってない。
ヒトシ　「おこってる。
タロウ　「おこっとらん！
ヒトシ　「おこってるじゃない。
タロウ　「おこっておりません！
ヒトシ　「まままま…ほら…ま、おちついて…ま、ま、おかけになって…さ、さ。

とイスをすすめる。タロウ、多少おこりながらもまわりを色々捜す…が、イスがない

タロウ　「…あの…イス…は？
ヒトシ　「アナタ、イスかけたいの？（少しメイワク気に）
タロウ　「え？
ヒトシ　「仕様がないな。
タロウ　「…え？…。
ヒトシ　「じゃ…むちゃむちゃでかくてここまで運んでくるのに雲つく大男が百五十人掛かりで一週間はかかるメンドウでタイヘンなイスと、すぐ持ってこられるちっちゃなイスが有りますけど、どちらがよろしい？
タロウ　「…ちっちゃい方…。
ヒトシ　「はい。

と、ちっちゃなイスを手の平に乗せて出す

タロウ　「…ハハハハハ…ちっちゃいなー。

ヒトシ　「ほら、ヒモがついています。どうぞおかけ下さい。

と、イスを首にかける。まじまじとイスのネックレスを見て

タロウ　「イスお、かけるんじゃない…イスに、かけるんだ…お…じゃない、に、お…じゃない、に…お、に…。

ヒトシ　「…おに？鬼退治は桃太郎、アンタウラシマタロウでしょ。

タロウ　「(しずかにいかっている)

ヒトシ　「まままま…じゃ、もう一コのイス注文しときますよ

サッと電話かけ

ヒトシ　「あ、イス一丁お願いします…はい、無茶苦茶でかいの。はい。

タロウ　「え？…

ヒトシ　「ハハハ…タバコ…タバコ吸います？

取りなすように胸のポケットからタバコを出し、差し出す

タロウ　「(タバコ…) あ、最近やめました…。

急に身を乗り出して

ヒトシ　「じゃガム、ガムもってるでしょ。

タロウ　「へ？

ヒトシ　「ガム。

タロウ　「…あ…ガムならもってますけど。

とポケットを触りさぐる

ヒトシ　「それガム、チューイングガム？フーセンの、フーセングガム？ガム、ガム噛むとよだれでるよね、よーさんと。

タロウ　「…ダ液の分泌が活発になりますね…どうぞ。

と、ガムを差し出す

ヒトシ　「…あ、それ、あれ…あれでしょ…パッチンてなるやつ…パチーンて…ふるい古い…だまされないぞ。
タロウ　「ちがいますよ。
ヒトシ　「そお？…じゃ…。

と恐る恐る、おそろしくゆっくりガムの方に手を持っていく。指がガムをつかむ一瞬前、突如

ヒトシ　「いたい！

と、手をひっこめる。再び手を出すとパッチンガムが人差し指の先にはさまっている

ヒトシ　「ほら、パッチンだ。
タロウ　「ちがうよ…（ほら）

と、ガム一枚出して噛む。包み紙を無造作にうしろにほかる。と、ヒトシ、ハヤテのように、カウンターをとびこえて、その包み紙を拾おうと走る。タロウ、同時にその包み紙を拾おうとする。モミクチャにうばい合う二人、お互いに引き合い、シマイに二つにびりりとやぶれる。と、二人また高速でカウンターに行き、分業にてセロテープでそれを貼り合わせる。それを二人ででていねいに先程落ちていたトコロに持っていって置く

二人　「ふーーーう…。

また先程の位置にもどり

ヒトシ　「…一枚ください…。

タロウ、ガムを差し出す。ヒトシ、セロテープをびびびと伸ばす。しばしの後、タロウ、包み紙を開いて、中身をヒトシの口の中に入れ、包み紙を真二つにやぶる。ヒトシ、ガムを噛みながら、それをセロテープで貼り合わせる。…しばしの間二人、ナングＮＡＮＧとガムを噛む

二人　「ＮＡＮＧＮＡＮＧＮＡＮＧＮＡＮＧ…。
ヒトシ　「…暑い…です…ねえ…。

一瞬暗転、ザー。元に戻るとタロウがいない。ヒトシ、フト、タロウのいた方をみる。柱の日めくり一枚落ちる。下には同じ日付の日めくり

ヒトシ　「…あれ？…ウラシマさ…。

又、一瞬暗転、ザー。元に戻る。二人、ガムを噛み続けている

ヒトシ　「…あつい…です…ねえ…。
タロウ　「なつ…なんでしょうねえ…。
ヒトシ　「ガム噛むとのどがかわく…。
タロウ　「たしかに。
ヒトシ　「…お茶…飲まれます？…。
タロウ　「…はい、いただきます…、
ヒトシ　「つめたいキンキンによく冷えた甘露な麦茶と、なまあたたかーい麦茶がありますけど、どちらがよろしい？
タロウ　「つめ…。

と、カウンターの上のコップをまじまじみる

タロウ　「…つめの入っていないコップで、つめたい麦茶いただきます…。
ヒトシ　「つめたいキンキンによく冷えた甘露な麦茶です。
タロウ　「つめたいキンキンによく冷えた甘露な麦茶…いただきます。
ヒトシ　「いれてきましょう。

と、カウンタアの上の二つのコップを取り、交互に置きかえる。次第にコップは増え続け、カウンタアの上にコップがあふれる。又次第にコップは減っていき、二つに戻る。二つのコップを持って奥の障子の方へ…フと立ち止まり、ふり返り

ヒトシ　「あ。
タロウ　「え？
ヒトシ　「その。
タロウ　「はい。
ヒトシ　「その、それ、その包み。
タロウ　「これ？

と、カウンタアの上のフロシキにおおわれた物体を指す

ヒトシ　「そう…それ、そのなか、みちゃだめですよ。
タロウ　「…は…はあ…。
ヒトシ　「絶対みないで下さいね。
タロウ　「…は…はア…。

と、右の障子を開け、閉めて、階段のアガリカマチから、もう一度カオのぞき

ヒトシ　「…みないで下さいね。
タロウ　「…はい…。

と、トットットッと、階段を昇っていく。タロウ、それを見送り、フト手をフロシキの方にもっていくと、またバット、右の障子開き

タロウ　「わっ。
ヒトシ　「みないで…くださいね…。
タロウ　「…。

又、障子閉まる、と、階段上より降りてきて、右の障子開けて戻ってくる（下半身ダミーを使ったトリック）

ヒトシ　「…おまたせしました。
タロウ　「あ…。

ヒトシの鼻にワッカがはまっている

ヒトシ　「…なにか？
タロウ　「あ…それ…あの…ま…いいか…。
ヒトシ　「はい、アナタの。

と、一つのコップをタロウにわたす。タロウ、コップの底をのぞき込む

ヒトシ　「よく冷えてるでしょ。
タロウ　「…あ…あの…これ…これ…つめ…つめが…。

ヒトシ　「なんです―
タロウ　「あ…あの…つめ…つめ…あ…そ…そっちの麦茶い、いただけません？
ヒトシ　「どして？
タロウ　「なんとなく…その…はは…つめ、つめ…ハハハハ…。
ヒトシ　「こっちのは、なまあたたかいですよ。
タロウ　「あ、いいです、それで。
ヒトシ　「じゃあ。

と、コップを交換する…タロウ、ちびっと口を付けのんで

タロウ　「…これ…へんな味ですね…。
ヒトシ　「アタシ最近インニョーやってましてね。
タロウ　「ぶっ。
ヒトシ　「カラダにいいんですよ。
タロウ　「…。

と、なにもいわずコップを置き、口の中をタオルで拭く

タロウ　「けーーけーーーけーーー。

ヒトシ、それをじっとみる。眼がおかしい

ヒトシ　「…で…御用件は…なんでしたっけ。
タロウ　「…あ…そ、そうでしたね…ハハハ…なんか、いろいろあってわすれてましたよ…ハハハ…。

アタリ見回して

タロウ　「このたあたり…かわっちゃいましたね。
ヒトシ　「は？
タロウ　「あ、いや…実は、アタシ…昔、このアタリに住んでいましてね。
ヒトシ　「ほお…。
タロウ　「（ヒトリゴトのように）このアタリなんだがなあ。

アタリを見回す

ヒトシ　「おいくつまで？
タロウ　「いや。こーーんなちっちゃな頃まででですけどね。

と、手で測るが高さは自分と同じトコロ

ヒトシ　「はあ…。
タロウ　「ここ、この辺、長屋あったでしょ。二階が素通しで全部つながってる。
ヒトシ　「今でもありますよ、ほら、ここもそうですよ…。
タロウ　「あ、そうなんですか。
ヒトシ　「はい。
タロウ　「原っぱもなくなっちゃったんですね。
ヒトシ　「どの？
タロウ　「たぶん…ほら…この長屋が切れる北の辻むこう…ほら…たしか今ナントカ病院になっているトコロ。
ヒトシ　「ナントカ病院なら東の辻むこうでしょう。
タロウ　「あ、なら、それ、それだ。
ヒトシ　「ナンタラ病院なら北の辻むこうにありますけど。
タロウ　「あ、じゃそれだ。
ヒトシ　「で？
タロウ　「ちっちゃい頃その原っぱで…。
二人　「ひろったんですよ。
ヒトシ　「なにを？
タロウ　「…あなた…くだんって知ってます？
ヒトシ　「モーーーーオ

雄叫ぶ

タロウ　「にんべんに、うしと書いて、くだんです。ま、ひとと牛のアイノコのような…どうぶつ…です。顔が牛で体がにんげんのね…あとで知ったんですが、くだんは歴史上の 大凶事大異変が始まる前に生まれて、これから起こることの数々を予言して（そして）死んでいくんだそうです。…くだんには、予知能力があるんです。
ヒトシ　「アタシにもあーりますよ、予知のーりょく。
タロウ　「え？

ヒトシ　「…予言しよう！くわっ！あと三十分以内に、ここ、ここに〇〇ピザが出現するであろう。

すっと電話器をとってダイヤル回し、ピザ屋に本当に注文する（ピザ屋は日替わり）。受話器置くヒトシ。（このアト何十分か後、ピザが届いた時点で実際にピザが舞台上に配達される。ヒトシは毎回、芝居を中断し、そのピザを受け取る）

タロウ　「…アンタそれ、予言じゃなくて注文じゃないの。
ヒトシ　「ワレカンセズ。
タロウ　「予言はもっと不測の事態をいい当てるものです。
ヒトシ　「…んで？
タロウ　「え？
ヒトシ　「それでどうなりました？
タロウ　「あ…それで…そのはらっぱで…アタシ…くだんをひろったんですよ。
ヒトシ　「ききました。
タロウ　「ひろって二階の片隅で…ないしょに…飼っていたんです…。
ヒトシ　「…で…どうなりました？
タロウ　「…それが…オボエテ…ない…のです。
ヒトシ　「おぼえてない？
タロウ　「はい…で、さいきん、ねむるとですね。
ヒトシ　「はい。
タロウ　「その…くだんがゆめにでてきて。
二人　「いうんですよ…。モウスグダ。
タロウ　「って…もう気になって気になって、ここんとこねむることが…できないのです。
ヒトシ　「ネテルクセニ。
タロウ　「で、ココにやってきた…と…いうわけです…。
ヒトシ　「飼ってたくだんがどうなったか。
タロウ　「そう。それが気になって気になって。
ヒトシ　「じゃ、昔にいって、どうなったかみてこればいいわけだ。
タロウ　「え…あ…まあ…。
ヒトシ　「…（小声で）タイムマシーン…。
タロウ　「…え。
ヒトシ　「タイムマシーン。
タロウ　「ひえっ？

ヒトシ　「タイムマシーンでいけばいい。
タロウ　「え？
ヒトシ　「タイムバシーン。
タロウ　「あ…アレ…ほんとなの。
ヒトシ　「これだー♪

と、下より二台のタイムマシン（トコヤセット）を出す（図二）

ヒトシ　「これが当店自慢のタイムマシーーーン！
タロウ　「…これ？
ヒトシ　「サアサア、これを、この輪をくぐればどこでもいける、デボン・石炭・ジュラ・白亜、石器時代かベックバン。
タロウ　「…あ…あの…。
ヒトシ　「さーーーあ。

ムリヤリ、タロウにかぶせる。自分もかぶる

ヒトシ　「ほーーうら、未来人さんだあっ、あ、未来人さんがいる…。

タロウを指して

ヒトシ　「ボンズール、コナネチワ…アタクシ、トオイ、ムカシカラ、ヤテキマシタヨ。

おじぎする

タロウ　「…くるってる…。
ヒトシ　「くるってあらーーん！…さ、さ、さ、みらいのすてっぷでおどりましょ。

と、タロウに近づき、むりやり手をつなぐ、と、♪タンゴのようなエキセントリックな曲♪二人くるくる回りながら踊る。ソレゾレロからフーセンガムがふくらんでいる。…あるキレメで踊り終わる

タロウ　「…あんた…ほんとは…なにやさん？
ヒトシ　「そこ。
タロウ　「え。

ヒトシ　「ソコにかいてアル…。

と、カウンタアの〈■ヤ〉と描いてあるトコロを指す。タロウ、それをみて（図三）

タロウ　「…なんとかヤ…しかく?ヤ?
ヒトシ　「それくついてるね。

ぴょいと猿のようにカウンタア乗り越えて■の部分をはなす

ヒトシ　「…こうする…。

♪ザーーーー〈トコヤ〉となる

タロウ　「…ト…コ…ヤ…?
ヒトシ　「そうお…よ。

シャキンとよく切れそうなゾーリンゲンのハサミ両手に持ち、ヒトシ、雄叫び

ヒトシ　「モーーーーーオ…さーあ、首の散髪だあっ。
タロウ　「く、くびはいやだ。
ヒトシ　「そのイスのネックレスに沿って…チョキチョキチョキーと切る。

タロウ、ネックレスにさわる

タロウ　「き、きったら、ちぎれちゃうでしょ。
ヒトシ　「ちょぎれたら、またセロテープでくっつければいいでショ…これとコーカン。

と、カウンタアの上に一瞬、牛の頭が出現する

タロウ　「わっ！
ヒトシ　「…モウスグダ…。
タロウ　「…え！…。
ヒトシ　「…モウスグダ…。
タロウ　「…なに…。
ヒトシ　「ハンスーーーー！

タロウ　「…も…もうすぐだ。
ヒトシ　「パチンと。
タロウ　「パチン、いや…。
ヒトシ　「パチンと…。

ほとんどヒトシ、タロウの間近か、半分上手に入っている

タロウ　「いたい！

パッと暗転、ザーという音と供にセロテープを伸ばす、びびびびびという音がつづく、しばしの間、一瞬カウンタアの中に翅のある「くだん」が居る

暗転

1

鋭いセミの声、突如パッと灯り点く。ヒトシ、先程二人でガムをかんでいた時の位置でガムをかみ続けている

ヒトシ　「…暑い…です…ねえ……ね。

と、タロウのいた方をみて

ヒトシ　「…あれ？うらしま…さん？…いない…おかしいな…どこいっちゃった？

柱の日めくり一枚落ちる。下にはまた同じ日付け。いない人を捜している感じ

ヒトシ　「…ウラシマさん…うらしまさあん…

さがす

ヒトシ　「どこです、ウラシマさあん…おーいウラシマさあん。うらしまさーんどこですかー。

と、ソコラをさがす、と、カウンタアの上のフロシキをとる、と、タロウの首がある

ヒトシ　「あ。
タロウ　「ＮＡＮＧＮＡＮＧ。

と、無心にガムをかんでいる

ヒトシ　「う…うらしまさん…
タロウ　「ＮＡＮＧＮＡＮＧ（目がうつろ）
ヒトシ　「うらしまさん！
タロウ　「え？

と、ハッとさめたように

ヒトシ　「ど…どうしました？
タロウ　「ハアハアハア…ヘンナユメみたあ…。
ヒトシ　「…どうしてこんなトコロに…。
タロウ　「あ…あたしら…さっきまで…ガムかんでたんですよね…。
ヒトシ　「ええ…。
タロウ　「…ハハ…なんか…あたし…ハハハ…ねむっちゃったみたいです…ハハハ～。
ヒトシ　「ねむった？
タロウ　「あ、あたし…ガムかんでると、スーーっとねむっちゃうことがあるんですよね…ＮＡＮＧＮＡＮＧ。
ヒトシ　「…しかしまた…ヘンなトコロでねちゃいましたね…。
タロウ　「…ハハハ…アタシ…ねぐせがわるくって……よっこいしょ。

と、カウンタアに入ったまま立ち上がる、ロボットのようだ

タロウ　「ふあ～～～～～。

と、ボディをポリポリかきながら、のびをする

タロウ　「ああ…しかしヘンナユメだったなァ。
ヒトシ　「…どんな？
タロウ　「ハハ…あたしがね…なぜだか…ロボットになってるユメなんです…。

ヒトシ　「ウラシマ一号応答セヨ。
タロウ　「ぴぴ。
ヒトシ　「あるけ。
タロウ　「ぴーーー、ガシャンがしゃん。

あるく

ヒトシ　「とまれ。
タロウ　「ぴた…でね、ニンゲンの命令どおり動かなきゃいけないわけ。
ヒトシ　「ウラシマ一号。
タロウ　「ぴぴ。
ヒトシ　「わらえ。
タロウ　「へへへ。
ヒトシ　「なけ。
タロウ　「あーーーーん。
ヒトシ　「おこれ。
タロウ　「ケッ。
ヒトシ　「いちどに。
タロウ　「へひんケッ。
ヒトシ　「あるけ。
タロウ　「ぴーーー、ガシャンがしゃん

あるく

ヒトシ　「おこれ。
タロウ　「ケッ…でね、そのロボットの…カッコわるいことといったら…夏向きロボットってことでね、背中が。
ヒトシ　「スダレ。

と、タロウの背中のスダレを持ち上げる。それをみて

タロウ　「…そうそう…こんなスダレ…で、んで…ハハハ…ユメってほんとヘンですよね…そのロボット、ハハハ、頭に…。
ヒトシ　「スイカ。

と、タロウのアタマさす

タロウ　「…かぶってるん…です…。

と、いいながら、自分の頭の半割れスイカをとる。それをみて。

タロウ　「…ハハハ…スイカだ……。

ヒトシ　「…。

ＮＡＮＧＮＡＮＧしながらカウンタアに行き、ヘンな目でみている

タロウ、もう一度スイカかむり

タロウ　「…（ＮＡＮＧＮＡＮＧ）……ハハ…ガム…もう味ないないや。

と、タロウロからガムを出してアンテナにそれを付け、先程置いたガムの包み紙をくっつけてひろい、ガムを包み、カウンタアにのせ、フと、ヒトシをふりむき、肩をすくめる

二人　「…。

タロウ、ゆっくりもといた位置に行き、スポッとはまり、首をひっこめる。スイカの皮がカウンタアの上に残る

ヒトシ、イスにこしかけ、ガムを包み紙にしまう。しばしの間、ポケットから、ウォークマンのイヤホーンのようなものを出し、両鼻に先をつめる。フンフンフンと、なにかをタンノウしてるよう…しばしの間…低い塀のようなシキリのムコウを前回と同じようにタロウ、頭にスイカをかむり、這ってくる。正面まで来て〈トコヤ〉という文字を〈凸凹ヤ〉にかえる（図三）、と

ヒトシ　「（大声で）おかえりなさい。

タロウ　「（大声で立ち上がり）ただいま。

と、ヒトシ、タロウの頭のスイカとカウンタアに残っているスイカを見比べる。タロウ、自分の頭のスイカをヒトシの頭にのせる。ヒトシ、カウンタアのスイカをタロウの頭にのせる。同時にカウンタアに半分新たなスイカが出る。しばし三つ巴のスイカ帽子のやりと

り。途中、半分スイカは四つまで増える。最後にヒトシ、ガムテープをびびびと拡げる。タロウ、二つのスイカをくっつけてヒトシに差し出す。びびびとスイカをガムテープでくっつけ、それをフロシキに包み、持つ

二人　「…。
ヒトシ　「…暑い…ですねえ…。
タロウ　「なつ…なんでしょうねえ…。
ヒトシ　「お茶…どうです。
タロウ　「あ、お茶！…けっこうです！
ヒトシ　「…そう…ですか…。
タロウ　「…あの…う…。
ヒトシ　「…なんです？
タロウ　「ここらに
二人　「ウラシマ
ヒトシ　「ならうちですけど。
タロウ　「はあ…。
ヒトシ　「で…。
タロウ　「あ…あたし…以前…あの…このあたりの、ウラシマさんて方のお宅でお世話になっていた事がありまして…。
ヒトシ　「この辺りはウラシマが多いですからねぇ。
タロウ　「はあ…。
ヒトシ　「で…いつごろ。
タロウ　「あ…あの…集団疎開で…ね。
ヒトシ　「はあ…じゃもうズイブンたちますね…。
タロウ　「はい…。
ヒトシ　「かわっちゃいましたでしょ…この辺り。

あたりを伺い

タロウ　「…ええ…。
ヒトシ　「さいきんは、なつだというのに…ニホンバヤシもでませんよ…。
タロウ　「…あ…そうですか……にほん、ばやし？…。
ヒトシ　「あ…おぼんの。
タロウ　「は…あ…は…こう…こういう？（と、盆踊りの格好する）
ヒトシ　「あ…ハハハハハ（うなずきながら）

タロウ　「ハハハハハハハハ（うなずきながら踊る）
ヒトシ　「ハハハ…なんですそれ？
タロウ　「あ…は…にほん…ばやし？
ヒトシ　「あ…そういうのも…あるんですか。
タロウ　「…へ？…。
ヒトシ　「それにもう五行もとれません…さみしい限りです…。
タロウ　「ハ…あ…あの…。
ヒトシ　「…五行？…ですか…。
タロウ　「あ…はい。
ヒトシ　「ほら…三行のうえの…。
タロウ　「へ？
ヒトシ　「…おいしかったなァ…。
タロウ　「あ…ごぎょうって…たべもの…。
ヒトシ　「くっちゃいかん！
タロウ　「ひ？
ヒトシ　「五行は猛毒です。
タロウ　「で、でも、おいしいって…。
ヒトシ　「おいしいのは、三行の方です…。
タロウ　「…はあ…。

首を少しひねっている

ヒトシ　「…でもホント…かわっちゃいましたよね…。
タロウ　「…はあ…。
ヒトシ　「むかし…は、よかったなァ…♪…美しい山はざっくりと削り取られ、まだらの地肌がカオを出し…。
タロウ　「はあ。
ヒトシ　「澄んだ流れはせきとめられ、濁ったみずたまりがいくつも…。
タロウ　「はあ（しみじみ）
ヒトシ　「ミドリ引き裂くように、アスハルトのドウロウはしり
タロウ　「はあ。
ヒトシ　「トラクタが鳥を追い払い、野原が整備され、ぴかぴかの住宅が立ち並んだ…。
タロウ　「…はあ…（しみじみ）
ヒトシ　「…そんな頃もあったんですよねぇ…。
タロウ　「ええ…。

ヒトシ　「…あの頃はよかった…。
タロウ　「え？

♪C・O

ヒトシ　「…でも…。
タロウ　「…はあ…。
ヒトシ　「疎開されてた頃は、まだ…いっぱいとんでいたでしょ。
タロウ　「は？
ヒトシ　「祖母がいつもいってましたよ…すごく綺麗だったって…。
タロウ　「あ…なに？…。
ヒトシ　「…あめ。
タロウ　「あめ？
ヒトシ　「あめ…ってんですよね。
タロウ　「あ…あの…あめ？
ヒトシ　「…こう…（フリ）
タロウ　「ハハハ…あめ…ですよね…。
ヒトシ　「あめ…です…。
タロウ　「あめならしってます。
ヒトシ　「よくとんでました？
タロウ　「あ…あの…とぶ？…というか…ふりますね…あめは…。
ヒトシ　「あめはふりますか！？
タロウ　「あ…は…ふ…ふります…ね…。
ヒトシ　「へええ…。
タロウ　「へ？…あの…ここら…ふりませんか？
ヒトシ　「ここらじゃ最近ふりませんよ…這ってます。
タロウ　「はう？
ヒトシ　「カワベとか池とかでね…。
タロウ　「あ…。
ヒトシ　「泳いだり。
タロウ　「？…は…（小声で）あめあめあめかめかめかめ…（ほうげんか…）ああ、かめ…ね…ハハハ…こんなのね…こんな（フリする）

ヒトシうなずきながら

ヒトシ　「ハハハハ。
タロウ　「こんななって、こう、こーいう。（這う）
ヒトシ　「ハハハハ…。

タロウ這いながら自分の背中指し

タロウ　「ハハハハ…コーラ、コーラ…。
ヒトシ　「ハハハ…それ、かめ、みたいですね。

タロウ起き上がり

タロウ　「かめですコレ。
ヒトシ　「かめがとぶわけないでしょ。
タロウ　「あめってなんです。
ヒトシ　「アナタ…あめ、しらないの？
タロウ　「あ…あめ…は、しってます…。
ヒトシ　「とぶでしょ。
タロウ　「とびません。
ヒトシ　「はいますね。
タロウ　「はうのはカメ。
ヒトシ　「節分にまきますねぇ。
タロウ　「それはマメ。
ヒトシ　「アタシらの主食です。
タロウ　「それはコメ。
ヒトシ　「アンタが今みてるのは。
タロウ　「ユメ。
ヒトシ　「サケは。
タロウ　「ノメノメ。
ヒトシ　「ヤギは。
タロウ　「メーメー。
ヒトシ　「うちの祖母。
タロウ　「ウメってんだろ。
ヒトシ　「トメです。
タロウ　「おちょくってんの？
ヒトシ　「はい。

タロウ　「テメー！
ヒトシ　「キャー。
タロウ　「ヒメー。
ヒトシ　「ほっとくとのびますね。

タロウ、前に行き、落ちているツメひろってきて、みせて

タロウ　「それはツメだ！
二人　「…。

ヒトシ、それを取り、コップの中に入れる

ヒトシ　「つめ…は…とびますね…。
タロウ　「（ひろった辺りをみて）…とびます…。
二人　「…。

セミの声、遠くの雷鳴

ヒトシ　「…むし…あつい…。
二人　「あめでもふりそうだ…。
タロウ　「え？
タロウ　「あめだ！

突然ゴロゴロバシャンザーとはげしい雨。突如元にもどる、セミの声

ヒトシ　「え？
タロウ　「あ。
ヒトシ　「あめ…って…なんです。
タロウ　「あ…あめ…あめ…あめあめあめ…はめはめはめ…はめ…はめ。

ふとヒトシを振り返り、ハナのアタリをじっとみて

タロウ　「…なに…はめてんです…それ…。
ヒトシ　「え？
タロウ　「…それ…。

ヒトシ　「…あ…これ？
タロウ　「はい。
ヒトシ　「ああ…じぶんばかり（やってて）すみません…。

と、ハナから引き抜き、ポケットよりＣＤデッキの本体を出して、スイッチを切り、中から蚊取線香を出す

タロウ　「あ…。
ヒトシ　「金鳥、平成後期モノのレプリカです…。
タロウ　「は？…。
ヒトシ　「かけましょうか…。

と、蚊取立てを拡げて、先端部を指しながら

ヒトシ　「このハリ、もう仲々手に入らなくってねえ…。

と、カウンタアよりものすごく長い火の付いたローソクがユックリ伸びてくる。それで蚊取線香に火をつける。セミの声大きくなる。ケムリたなびく。ローソク、ユックリ縮んでいく

ヒトシ　「スーーーウーーー…やっぱりアナログはいいなァ。
タロウ　「あ…あの…。
ヒトシ　「おもいだすなァ～。
タロウ　「…。
ヒトシ　「むかしはよかった…。
タロウ　「…。
ヒトシ　「なつがあまだあった。

セミの声大きくなる

タロウ　「へ？…なつ？…。
ヒトシ　「なつ…って…しってます？
タロウ　「し、しってるもなにも…。
ヒトシ　「良い季節でした。
タロウ　「へ？

ヒトシ　「なつは、よかった。
タロウ　「よかった？

イキナリ、ラップ音楽

♪蝿はとびＣＯＷ気温はあがる　蚊は刺す血を吸う赤痢がはやる
日射しは眩しい木陰は涼しい　たいふんオリオンてんかふん
カチワリヒマワリカキゴオリ　海はにぎわい日は永い　はい

♪蛍とびＣＯＷ夜でもあつい　クロールクロールなみなみ高い
クマゼミヒグラシ夜空に花火　アサガオヒルガオセキランウン
カブトクワガタ日は永い

タロウ　「ハハハ…ラップみたい…。
ヒトシ　「プーーー（とラッパを吹く）
タロウ　「それはラッパ。
ヒトシ　「…ラップはもうちょいアトです。
タロウ　「へ？
ヒトシ　「…なつはよかった…なァ…。
タロウ　「あ…は…なつは、いい、ですよね…。
ヒトシ　「そんなころも…ありました。
タロウ　「へ？
ヒトシ　「いまじゃあ…モウ…蝉もなかない…。
タロウ　「…ないてるじゃない…。
ヒトシ　「ＳＥです。

ピッとカウンタアの上のスヰッチを押す、蝉の声消える

タロウ　「あ。
ヒトシ　「ね。
タロウ　「なんだ？…。
ヒトシ　「…たいね…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「かえりたいね。
タロウ　「なに。

ヒトシ　「…なつにかえりたいね…タロちゃん。
タロウ　「…いまは、なつだろ。
ヒトシ　「どうしてなつなんです？
タロウ　「…どうしてって…こ…こんなにあつい…じゃないですか…。
ヒトシ　「あついですか…。
タロウ　「あついよ…。
ヒトシ　「のど…かわきますね…。
タロウ　「…ああ…かわく…。

と、何気なくカウンタアの上に出たミカンを手にし、ムイシキに皮をむき一房口に入れる

ヒトシ　「あついですよね…ふゆだというのに。
タロウ　「ふゆ？
ヒトシ　「みかんは冬のたべものですよ。
タロウ　「あ…。

ミカンに気付く

ヒトシ　「ね。
タロウ　「え…？
ヒトシ　「むかしに、かえりたいね…。
タロウ　「(スッとミカンを穴に捨てる)
ヒトシ　「なつがあったむかし…かえりたいね…。
タロウ　「(少々おびえて首をふる)
ヒトシ　「あなた…むかしにかえりたくてここ…来たんでしょ。
タロウ　「…ちがう…。
ヒトシ　「じゃなにしにきた。
タロウ　「…むかし…お世話になった…ウラシマさんに…。

フロシキ包みを持って

タロウ　「お中元とどけに…。
ヒトシ　「お歳暮？
タロウ　「お中元。
ヒトシ　「…なに？

タロウ　「お中元。
ヒトシ　「いや…それ…その…中身…。
タロウ　「…スイカ…です。
ヒトシ　「スイカ？
タロウ　「スイカ。
ヒトシ　「スイカって…丸いんだ…。
タロウ　「スイカは普通丸いでしょ。
ヒトシ　「で、中身は？
タロウ　「だからスイカ。
ヒトシ　「いや、スイカの中身。
タロウ　「スイカの中は赤い実と黒いタネだ…。
ヒトシ　「…それ…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「それ…軽そうですね…。
タロウ　「…。
ヒトシ　「…あなたはしっている、中身なんてないことを…。
タロウ　「…。
ヒトシ　「もう此の世にスイカなんて…ありはしないということを…。
タロウ　「…どういうこと…。

と、ヒトシ、ピッと先程のスキッチを押す、カナカナの声がなる、灯りタ方っぽく

タロウ　「なんだ？
ヒトシ　「フンイキもり上げてんです…ねえ…こんな声きくと、なんとのうさみしくなる…ね。
タロウ　「え。

ヒトシゆっくり前ナナメ４５度をみる。タロウもつられてソチラをみる。と、突然ヒトシ、タロウの手を握って

ヒトシ　「タロちゃん

ジジジジジジと、電気音

タロウ　「わっ。

と、手をふりきりとびのいて、つかまれた手をさすり♪

タロウ　「…なんだアンタ…。
ヒトシ　「さみしいね…。
タロウ　「なんだ？
ヒトシ　「たあれもいない。
タロウ　「…いるだろ。
ヒトシ　「たあれもいない、たあれもいない、たあれもいない…。
タロウ　「なにいってんだ…。
ヒトシ　「あいつがいったとおりだ。
タロウ　「あいつ？
ヒトシ　「二階の。

左手の窓のムコウをヒトシが音もなく落ちる、一瞬ソチラをみる二人

タロウ　「え？
ヒトシ　「さみしいなあ…ウラシマさん…。
タロウ　「……さみしくない…。
ヒトシ　「ひとりぽっちでさみしいなあ…。
タロウ　「さみしくなんかありません。
ヒトシ　「かえりてみれば　いえもなし　まちもなし　やまもなし　かわもなし…。
タロウ　「…あんた、いったい、なに。
ヒトシ　「ぼくだよ。
タロウ　「え。
ヒトシ　「わすれちゃったの？…。
タロウ　「…（じっとみる）
ヒトシ　「かえろ…むかしに…。
タロウ　「…どうやって…。
ヒトシ　「たまてばこ。
タロウ　「たまてばこ？
ヒトシ　「それ…アナタのもってきた…ソレ。
タロウ　「へ？…これ？（と、包みさす）
ヒトシ　「それ。
タロウ　「これ…お中元の…スイカ…。

ヒトシ　「あけてごらん。
タロウ　「へ？
ヒトシ　「あけてごらんよ…それ。
タロウ　「…。
ヒトシ　「あけられないの？
タロウ　「…。
ヒトシ　「こわいものね。
タロウ　「…こわくない。
ヒトシ　「じゃあけてごらん、たまてばこ…。
タロウ　「…これはスイカだ。
ヒトシ　「カラッポの？
タロウ　「カラッポじゃない。

と、包みをほどく、と、四ツに切られたみずみずしいスイカがゴロンと出てくる。同時に真昼のように明るくなり、蝉もジージー鳴き始める。一瞬、シャガンだヒトシ、サランラップをびびびと伸ばしながら立ち上がる。ヒトシ、頭に白い麦ワラ帽子をかむっている。
♪C・O。蝉の音

2

タロウ　「…ラップ…。
ヒトシ　「食べ切れないね…こんなに…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「半分はレイゾウコにとっとこな。

ヒトシ、スイカの二切れをラップで包む

タロウ　「ぁ…ああ…。
ヒトシ　「ひさしぶりだねほんと。
タロウ　「ほんと…。
ヒトシ　「なんねんぶりだろね。
タロウ　「ずいぶん…たつよね…。
ヒトシ　「でもタロちゃん、かわんねえなァ…。
タロウ　「ひ…ヒトシくんこそ…かわらない…。

ヒトシ　「ソ…かな…。

またびびびびとラップを張り、もう一切れのスイカを包み出す

ヒトシ　「これ高かったろ。
タロウ　「あ…これ？…んなことないよ。
ヒトシ　「こんなでかいウメボシ。
タロウ　「…スイカだよ、これ。
ヒトシ　「でもあかいじゃない。
タロウ　「スイカもあかいの。
ヒトシ　「ウメボシもあかいよ。
タロウ　「あかけりゃウメボシってわけじゃないでしょ。
ヒトシ　「じゃあかけりゃスイカなわけ？
タロウ　「(※)…そういうわけじゃない…けど…。
ヒトシ　「だろ。
タロウ　「スイカとウメボシは違うんだ。
ヒトシ　「どう？
タロウ　「ウメボシはウメをほしたやつ、スイカは…スイカをほさないやつ。
ヒトシ　「よくわからんな。
タロウ　「ウメボシは…こんなにでかくない。
ヒトシ　「じゃめずらしいでしょ、こんなでかいウメボシ。
タロウ　「めずらしくない。
ヒトシ　「なぜ？
タロウ　「…これはスイカだから。
ヒトシ　「これスイカなんだ。
タロウ　「そう♡
ヒトシ　「…でっけえなァ…。
タロウ　「…ひょっとしてアンタスイカ知らないの？
ヒトシ　「知ってるよ。
タロウ　「ならいいけど。
ヒトシ　「スイカはウメボシじゃないんだよね。
タロウ　「そう♡♡
ヒトシ　「じゃなに？
タロウ　「…スイカは…スイカだ。
ヒトシ　「スイカってなに？

タロウ「これ！
ヒトシ「ウメボシだろ、これ。
タロウ「これはスイカ。
ヒトシ「あかいじゃない。
タロウ「スイカもあかいんだ。
ヒトシ「ウメボシもあかいぞ。
タロウ「あかけりゃウメボシってもんじゃないんだよ。
ヒトシ「じゃあかけりゃスイカなの。

※に戻る

タロウ「ああ…あかけりゃスイカだ、みーんなスイカだ。
ヒトシ「みんなスイカ？
タロウ「あかいのみーんなスイカ！
ヒトシ「ウメボシも？
タロウ「…ウメボシはウメボシ。
ヒトシ「コレは？
タロウ「…スイカ…。
ヒトシ「(じゃ) ウメボシはどこいった？
タロウ「…どっかとおいとこ。
ヒトシ「…さみしいね。
タロウ「さみしくない！
ヒトシ「どして。
タロウ「スイカのセカイにウメボシは入れないんだ。
ヒトシ「なぜ。
タロウ「スイカとウメボシはちがうから！
ヒトシ「どこが？
タロウ「…におい…ニオイがちがう…。
ヒトシ「(嗅いで) …なあんだ。
タロウ「…ね♡
ヒトシ「カブト虫だコレ。
タロウ「…。
ヒトシ「オレタチ、カブト虫くおうとしてたんだ。
タロウ「くおうとしてない。
ヒトシ「だよな、カブト虫はくえないよな。

タロウ　「カブト虫はくえない。しかしコレはくえる。なぜならばコレはスイカだから…。
ヒトシ　「ほう。
タロウ　「わかった？
ヒトシ　「わかりました。
タロウ　「（少し涙ぐみ）あ、ありがとう。
ヒトシ　「カブト虫はくえない。
タロウ　「うんうん…。
ヒトシ　「けどこのカブト虫はくえる。
タロウ　「（泣き笑い）ハハ…これ…すいか…すいか…。
ヒトシ　「…どうしても？
タロウ　「どうしても。
ヒトシ　「どーーーしても。
タロウ　「どーーーしても。
ヒトシ　「そこまでゆうんだったら…スイカてことにしておくか。
タロウ　「…コレなに？
ヒトシ　「スイカ。
タロウ　「よしよし。
ヒトシ　「でもこのスイカ。
タロウ　「なに？
ヒトシ　「つのがないね。
タロウ　「…スイカにつのはない…。
ヒトシ　「そうか、コレ、メスのスイカか！
タロウ　「メスでもオスでもいい、スイカだったらいい。
ヒトシ　「よしっと…。

と、スイカの包み持って

ヒトシ　「じゃこれレーゾーコ入れてくるね…先、食べてていいよ…。

と、スイカ持ち、奥へ

タロウ　「あ…。
ヒトシ　「（戸の前で振り向き）…なに…。
タロウ　「…しお…。

ヒトシ　「え？
タロウ　「しお！もってきて！
ヒトシ　「そう…しお…スイカはしおかけんとね。
タロウ　「あ、しお。
ヒトシ　「しおかけるとうまくなるんだなァ…これが…フフフフ…。
タロウ　「ほいじゃ…しお、もってくる…。

と、戸を開けてむこうに

タロウ　「…ハハハ…スイカスイカ…と…しおをパラパラ…って。

と、スイカをめでる。手でスイカをちょんちょんとつっついたりする…と異物が…ひょいとそれをつまみ上げると、ウメボシである。しばしそれを見つめて、口にふくむ。しょっぱそうにひどくカオをしかめる。と同時に戸開き

ヒトシ　「おまたせ…。

ヒトシ、ゴミバサミに火の付いたスミをはさんでウチワであおぎながら出てくる

タロウ　「…なにそれ？
ヒトシ　「…しお…。
タロウ　「…どこが？
ヒトシ　「ほら、一酸化炭素…でてるでしょ。
タロウ　「……ＣＯ？
ヒトシ　「そ、ＣＯ。
タロウ　「それ、どやってスイカにかけるの？
ヒトシ　「（意に介せず）これでウナギ焼くとうまいんだよね。
タロウ　「ウナギとウメボシはくい合わせだろ！
ヒトシ　「…それ…スイカじゃなかったの？
タロウ　「…あ…。
ヒトシ　「土用丑も近いし、ウナギ焼くか。
タロウ　「…いい…。
ヒトシ　「…せっかくだからあたったら…。

タロウ、手をかざして、ついあたる

ヒトシ　「あついでしょ。
タロウ　「…あついね…。
ヒトシ　「けむりがでてる。
タロウ　「…でてるね…。
ヒトシ　「よくすってみたら？
タロウ　「スィ～～～っ。
ヒトシ　「…どう？
タロウ　「な…なんかアタマがボーとするね…。
ヒトシ　「…一酸化炭素中毒じゃない？
タロウ　「…かもね…。
ヒトシ　「ハハ。
タロウ　「ハハハハハへへへへへハハハハ。
ヒトシ　「ハハハハハハハ。
タロウ　「ハハハハハハ…ボー、アタマがボーッと…消せ。
ヒトシ　「は？
タロウ　「…けしなさい。
ヒトシ　「…もったいないなァ。

と、コップに入れる

タロウ　「あー、エケホエケホ…へんなもんすってのどがかわいちまった、エケホエケホ。
ヒトシ　「すんごくぶっとい茶柱の立った麦茶ならあるけど…。

と、スミの入ったコップ

タロウ　「…いい。
ヒトシ　「いらない？
タロウ　「…スイカたべるからいい。
ヒトシ　「しおは？
タロウ　「もういい。
ヒトシ　「いらない？
タロウ　「い・り・ま・せ・ん（スイカ食べ出す）
ヒトシ　「ふうん…。

と、ポケットから食卓塩出してふりかけてスイカ食べだす

タロウ　「…あ…。
ヒトシ　「スイカって…うまい…もんだね…。
タロウ　「…あ…あ…。
ヒトシ　「なに。
タロウ　「しお…。

ヒトシ食べながら

ヒトシ　「ハハ、うまい、うまい。

たっぷりしおかけて

ヒトシ　「うまい、うまい。
タロウ　「…ハハハ…ヒトシくんは悪フザケが好きなんだから…しお…（手を出す）…しおちょーだい。
ヒトシ　「白いのと黒いのあるけど。
タロウ　「しろ。
ヒトシ　「はい。

と、タロウ食卓塩もらいスキップで下手の方へ。一瞬下手の壁よりローソクがのびてきているのを見付け、手で押し込める。下手のカウンタアに行きスイカにシオを一生懸命ふる。しかし出てこない。手をびんにつっ込んで中から白い紙をひき出す。ムカッとして、食卓塩をドンと置く。仕方なくスイカを食べはじめる。しばし同じフリで二人スイカを食べる

二人　「あーもうハライッパイ。

と、食べかけのスイカ置く

タロウ　「フウ…。
ヒトシ　「…残っちゃった…。
タロウ　「もったいないね。

ヒトシ　「ああ…よし、少年ロボットウラシマ一号、応答せよ。
タロウ　「…へ？…。
ヒトシ　「ぴぴは？
タロウ　「…え？…。
ヒトシ　「いつもやってたじゃない、ぴぴって…。
タロウ　「…ぴぴ？…。
ヒトシ　「ゼンブくえゼンブくえ。
タロウ　「…よしなよ…ひとしくん…。
ヒトシ　「くうんだウラシマ一号。
タロウ　「…よしなったら。
ヒトシ　「くうんだウラシマ一号。
タロウ　「やだ。
ヒトシ　「くえ。
タロウ　「やだ。
ヒトシ　「くえ。
タロウ　「やだ。
ヒトシ　「くえ。
タロウ　「やだ。
ヒトシ　「くうんだウラシマ一号！
タロウ　「…おれはウラシマ一号じゃない。

窓の外をヒトシが落下　♪ザー

ヒトシ　「…じゃウラシマ二号…くえ。
タロウ　「…ぴぴ…。

タロウ、スイカをたべ出す

ヒトシ　「…スイカで…溺死か…。
タロウ　「…え？（顔をスイカからあげる）
ヒトシ　「ハハハハハ…タロちゃん…かわんねぇなァ。
タロウ　「…ひとし…くんこそ…かわんない…。
ヒトシ　「…ほんと…。
タロウ　「…うん…。
ヒトシ　「かわんない？

タロウ　「かわらない。
ヒトシ　「…どうしてだろ…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「なつ…。
タロウ　「なつ？…。
ヒトシ　「なつ…タロちゃんこっちいたのは、なつだったね。
タロウ　「…うん…。
ヒトシ　「たのしかったな。
タロウ　「…うん。
ヒトシ　「かわおよいで、うみおよいで、たにのぼったな。
タロウ　「かわおぼれて、うみおぼれて、たにころげたよ。
ヒトシ　「…タロちゃんツイてなかったもな。
タロウ　「…うん。
ヒトシ　「そだそだ。
タロウ　「なに。
ヒトシ　「ハナビ。
タロウ　「はなび？
ヒトシ　「ハナビやったな。
タロウ　「はなび。
ヒトシ　「花火！

パチパチッという音♪と突如両手に火の付いた花火持ちカウンタアに飛び乗り腰かける。同時にタロウも横に。アタリは急に暗くなる

ヒトシ　「タロちゃんもやる？
タロウ　「うん。

と、一本をタロウに

ヒトシ　「まぶしいな。
タロウ　「うん。
ヒトシ　「キレイな。
タロウ　「うん。
ヒトシ　「うまそうァ。
タロウ　「え？

ヒトシ　「タロちゃん…。
タロウ　「なに？
ヒトシ　「花火喰う？
タロウ　「え？
ヒトシ　「はなびくう？
タロウ　「いらない。
ヒトシ　「くいなよ。
タロウ　「いらない。
ヒトシ　「くえよ！
タロウ　「くえない。
ヒトシ　「おれのはなびがくえねえっての！？
タロウ　「…よ、よしなよ…ひとしくん…。
ヒトシ　「…ハハハ…冗談冗談…。
タロウ　「…ハハハハ…。
ヒトシ　「な、タロちゃん。
タロウ　「なに。
ヒトシ　「はなくそは？

ヒトシ、はなほじりタロウにつきつける

タロウ　「…。
ヒトシ　「ハハじょうだ…。

と、タロウ、スッとヒトシのユビのハナクソたべる

ヒトシ　「…いいながめだね。
タロウ　「…うん。
ヒトシ　「ほら、なんとか嶽にかんとか峠。
タロウ　「あれは…なんだっけ山。
ヒトシ　「わすれちゃったよ河も流れてる…。
タロウ　「ココはいいとこ…だね…。
ヒトシ　「タロちゃん…。
タロウ　「なに？
ヒトシ　「いつまでココに陰嚢？
タロウ　「…父さんの仕事おわるまで。

ヒトシ　「父さん、なにやってたっけ。
タロウ　「ロボットの設計技師。
ヒトシ　「じゃタロちゃんの設計も？
タロウ　「…ぴぴ…。
ヒトシ　「ハハハ…冗談冗談…。
タロウ　「ひとしくんの父さんは？
ヒトシ　「ロケットの運転手。
タロウ　「すごいね。
ヒトシ　「恒星間虫穴航法でワシ座のアルタイル辺りをとんでるよ。
タロウ　「いつかえってくんの？
ヒトシ　「わかんない。
タロウ　「アルタイルは牽牛だよね。
ヒトシ　「七夕の？

と、ヒトシ、表に「七」、ウラに「夕」と書いた紙をみせ、タロウにわたす。タロウその髪をひらく。と、「死」という字になる（図四）

タロウ　「そう牽牛と織姫の。
ヒトシ　「七夕ってさ、たしか牽牛が年に一回織姫をおかして牛の子をはらませる因果話だったよね。
タロウ　「…なんかちがうな…。
ヒトシ　「そうだ。
タロウ　「なに。
ヒトシ　「今日は七夕じゃん。

♪ 突然ザッとカウンタアのうしろ右から短冊のいっぱいついた笹の葉が立つ。二人、空を見上げて

ヒトシ　「ほしがキレイだね。
タロウ　「…うん。
ヒトシ　「まぶしいね。
タロウ　「うん。
ヒトシ　「たべたいね。
タロウ　「たべたくない。
ヒトシ　「あれがリゲル、あれがヴェガ。

タロウ　「あれがおうし座プレアデス。
ヒトシ　「あれがなんとか。
タロウ　「あれが感とか。
ヒトシ　「…ロマンチックだね…タロちゃん。

と、タロウの腰に手を回し、異常にくっつく

ヒトシ　「ロマンチックな星の宵だね…タロちゃん。
タロウ　「よ、よしなよ、ひとしくん！

ヒトシ、しばし熱いマナザシでみつめて強引にキスする

ヒトシ　「…ハハハ…冗談冗談。
ヒトシ　「なな
タロウ　「なに？
ヒトシ　「タンザクにねがいごと書くとかなうんだよね。
タロウ　「うん。
ヒトシ　「ねがいごとしよ。
タロウ　「…うん。
ヒトシ　「なんかすげえのがいいよな。
タロウ　「…うん。
ヒトシ　「よし、まずでっけえたいふうがきますように、だ。

はげしい♪Ｃ・Ｉ

タロウ　「え。
ヒトシ　「たいふうはいいぞ。
タロウ　「どきどきするね。
ヒトシ　「カゼがうおんうおん吹いて雨がドパドパ降って屋根も町もとんでけーだ。
タロウ　「…どきどき。
ヒトシ　「次はでっけえ地震がきますようにだ、まぐにちゅーど百くらいの。
タロウ　「え。
ヒトシ　「地震はいいぞ、ぐらぐらゆれて、地面は割れてガスが吹きだす山はくずれる津波はくる…どきどきするなァ…。
タロウ　「…うん…。

ヒトシ　「あと、火山バクハツしますようにだ、洪水きますように、地軸曲がりますように、ヒコーキおちますように、隈石おちますようにとにかくすごいことおきますように。オレのタンザクにはそんなこといっぱいかく…タロちゃんは？

タロウ　「え。

ヒトシ　「なにねがう？

カウンタアのスキッチ押す、やさしい♪C・I

タロウ　「ハハハ…世界人類が幸せになりますように…。

ヒトシ　「…それから？

タロウ　「いるかさんやオケラさんやゴミムシさんやアメンボさんやタコさんが幸せでありますように。

ヒトシ　「ふんふん。

タロウ　「わんわんさんやにゃーにゃーさんやめーめーさんも幸せでありますように。

ヒトシ　「ふんふん。

タロウ　「えんぴつやさんやけしごむやさんや…。

ヒトシ　「ウソツキ。

と、カウンタア左のうしろよりザパッとタンザクの一杯ついた笹があらわれる

ヒトシ　「これ、なんだ？

タロウ　「あ。

ヒトシ　「おまえんちの庭からひっこぬいてきた。

タロウ　「…。

一枚ずつよみながら

ヒトシ　「ひとしくんがあなにおちますように…ひとしくんがどぶにおちますように…ひとしくんが肥溜めにおちますように。

タロウ　「…ハハハハ…。

ヒトシ　「ひとしくんがころんで前歯二本もげて、そこからパイキン入ってカオパンパンにはれあがって眼がみえなくなって山のてっぺんから足滑らせて谷底におちていきますように・ひとしくんが西瓜のくいすぎで泳げなくなって水底におちていきますように・ひとしくんのアタマの上にキコリの切った切り株がおちてきますように・ひとしくんのアタマの上にカミナリがおちますように・ひとしくんが二階

からおちて、くぴがもげますように。
タロウ「…ハハハ…。
ヒトシ「タロちゃん、注文が細かいね…。
タロウ「…ハハ…でしょ…。
ヒトシ「デテールもこってるし。
タロウ「…へへ…まあ…ね。
ヒトシ「字もなかなかのもんだ。
タロウ「へっへっ、こりやまた大将お口がうまい、と。
ヒトシ「もげるってなに？
タロウ「え…ハハハ…こう…こう。

もぐふりをする

ヒトシ「おれってよくおちるね…。
タロウ「ハハ…おきおつけくださいね…て…。
ヒトシ「こわいな。
タロウ「こわいでげすね、ハハ…。
ヒトシ「ハハハ…そんなにオレのこときらい？
タロウ「(首ふる)
ヒトシ「…それ。
タロウ「え？
ヒトシ「…その人形…かわいいね。

タロウ、知らぬ間に持っているワラで作った首のもげそうな人形に気付く

タロウ「あ。
ヒトシ「ホシ草のいい匂いがする…。
タロウ「…。
ヒトシ「くび…もげそうだね…。
タロウ「(いっしょうけんめいなおす)
ヒトシ「…その中、つめが入ってるでしょ…オレのつめ。
タロウ「(首ふる)

ボーンボーンと時計が二回鳴る

ヒトシ　「…丑の刻…。

灯り変り、夜の虫の音

ヒトシ　「…くぎ。
タロウ　「ぎく。
ヒトシ　「…どうやってうったの。
タロウ　「え？
ヒトシ　「いまは時計がかけてある…。

柱の所に行き、時計をはずす。時計はクギにかかっていた。

ヒトシ　「…あのクギ…うったの…タロちゃんだよね。
タロウ　「…。
ヒトシ　「うしみつ、しおでからだきよめて。
タロウ　「…。
ヒトシ　「あたまに2本のつの立てて。
タロウ　「…。
ヒトシ　「そんなことするから…オレはいつまでもかわんない…。
タロウ　「え。
ヒトシ　「ちいきなタロウさん…。
タロウ　「…。
ヒトシ　「どうやってうったの？
タロウ　「…。
ヒトシ　「どうやってあんな高いトコロにくぎうった？

突如ドンドンドンとはげしく上手の方で戸を叩く音

ヒトシ　「はい。

と、上手にいき、むこうをのぞきこんで

ヒトシ　「いす？

タロウをふりむき

ヒトシ　「いすがとどいた…。
タロウ　「イス…。

ガッと、上手より巨大なイスの足がのぞく、それを押し戻すようにして

ヒトシ　「あ、はいりません、そと、そとでけっこうです。

ヒトシ、時計を持ったままカウンターの方にもどって

ヒトシ　「あんなでかいイスじゃなくても、とどくだろ、あれくらいのたかさ

と、クギのトコロを指す

ヒトシ　「ま、ゆめだからゆるしてやるけど。
タロウ　「え。
ヒトシ　「ゆめだからゆるしてやるけど、ひどいな、ワラ人形は…。
タロウ　「ゆめ？
ヒトシ　「ゆめでもやっていいこととわるいこと…。
タロウ　「これ、ゆめなの？
ヒトシ　「ゆめだろ、あんなドデカイイスが来ちゃうんだから。
タロウ　「…ゆめ…。
ヒトシ　「ゆめだよ。
タロウ　「ゆめ…かあ…。
ヒトシ　「ゆめだよ、ほら。

と、「ゆめ」と書いた上に蚊取線香がくっついた習字紙出す

タロウ　「あ、オレが小学校三年のとき五重丸もらった習字…。
ヒトシ　「な、ゆめだろ、五重丸がカトリセンコウだ。
タロウ　「ハハ…こりゃゆめだな。
ヒトシ　「五重丸もらったの、うれしかったろ。
タロウ　「そりゃもう。
ヒトシ　「だろうな、ほら。

と、ウラかえす

ヒトシ　「…丸が五十コもある…。
タロウ　「…ごじゅう、まる…ハハ、ゆめらしいなア…。

ヒトシ、知らぬ間にかつおぶしペロペロなめている

ヒトシ　「よっぽどうれしかったんだな。
タロウ　「なにそれ？
ヒトシ　「かつおぶし。
タロウ　「なんでなめてんの？
ヒトシ　「ゆめだから。
タロウ　「ハハハ…ゆめならゆるす…ハハハ…かつおぶし…ねえ…。

と、左ソデより「かおつぷし」と書いたでっかい習字が出てくる。タロウ、ふりむいて

タロウ　「ゆめだねえ、かつおぶしが習字ででてきた…（丸までついて…）
ヒトシ　「ゆめならでは…だねえ…。
タロウ　「ほーんと。

突如リーンと電話のベル。ヒトシ受話器とり

ヒトシ　「あ、はい、はい、そうですか、あ、はい、どうも！（切る）
タロウ　「なに？
ヒトシ　「宝くじで一等当たった。
タロウ　「わあ、ユメみたい。
ヒトシ　「かってないのに。
タロウ　「ゆめだねえ。
ヒトシ　「あ、なにかおちてるよ。

タロウ舞台に落ちていた札束をひろい

タロウ　「わあ、五重万円…ゆめみたい。
ヒトシ　「ゆめならではだねえ。
タロウ　「ほーんと。

ヒトシ　「で、
タロウ　「なに？
ヒトシ　「ゆめだからきくけどさ。
タロウ　「うん。
ヒトシ　「なんでオレのワラ人形なんてつくったの？

タロウ、ヒトシと人形さして

タロウ　「ハハ…ワラ人形なし！…ポイ。

と、穴にすてる。ピヨとまた穴からワラ人形でる

タロウ　「ハハ…なし…。

と、押し込む

ヒトシ　「ね、どうしてワラ人形？

何度も戻す、が、ワラ人形ピヨピヨと穴からでる

タロウ　「うーーん、うーーん…。

と、二・三回目で

タロウ　「あ、ほらみて、ほらこれ、これ、なっとう、なっとうだ、これ。

ワラ人形が納豆にかわっている

タロウ　「ハハハ…ゆめもやるもんだ。
ヒトシ　「どうしてオレのワラ人形にくぎうった！
タロウ　「あ、あたくし、こういうもんで。

と、ポケットより習字紙を出す、ヒトシ、折りたたんである紙を開く、「だっていじめるんだもん」と書いてある。習字は添削してある（図五）

ヒトシ　「そんなにいじめたっけオレ。
タロウ　「そりゃあもう。
ヒトシ　「そんなに？
タロウ　「そんなに…でも、もうなんともおもってないよ。
ヒトシ　「そりゃそうだろ。
タロウ　「え？
ヒトシ　「ねがいかなったもの。
タロウ　「なに？
ヒトシ　「わら人形ののろい…。
二人　「ひとしくんが２階からおちておおけがしますように。

ぴたと♪やむ、プィ～ンと蚊の飛ぶ音、タロウ目線で蚊を追い、ぴしゃりと両手でつぶす

ヒトシ　「…蚊をつぶしたね。
タロウ　「…つぶしたよ。
ヒトシ　「かおつぶした。

フッとうしろの習字みる

タロウ　「え？

タロウもみる、スッと習字消える

ヒトシ　「あのひ（と、麦ワラ帽子かむる）
タロウ　「…。
ヒトシ　「あのひオレ…二階からおちて…。

スッとしゃがむ

タロウ　「なに。

スッとウメボシみたいに赤い顔立ち上がる（ダミー）。声はヒトシ

ヒトシ　「かおつぶしちゃった。

笹ひっこむ。♪「悲しき片想い」の前奏

タロウ　「（同時に）はい、そのとおりです。あついあついあのなつ七月十五日、ぼくはたしかにひとしくんをつきおとしました、そしてもぎました、以上相違ありません。

と、同時に右の戸開く。食卓塩持ったヒトシが入ってくる♪C・O

3

ヒトシ　「おまたせ。
タロウ　「へ？
ヒトシ　「しお…もってきたよ。
タロウ　「あっ…。
ヒトシ　「ずいぶんくっちゃったね、スイカ。
タロウ　「…かお…。
ヒトシ　「…しお…だろ…。
タロウ　「かお…だいじょうぶ？
ヒトシ　「かお？
タロウ　「かお…。
ヒトシ　「どうしてわかったの？
タロウ　「え？
ヒトシ　「でも、銘柄がちがう…。
タロウ　「…へ？…。
ヒトシ　「…かおうは月のマーク、でもこれは牛のマーク、牛乳石鹸でした。
タロウ　「え？
ヒトシ　「これ粉セッケン…しおがなかったからかわりにもってきた。
タロウ　「は？…あ…は…せっけん？
ヒトシ　「にてるでしょ、しおと粉セッケン。
タロウ　「…にてるね……ハハハ…にてる、にてる。
ヒトシ　「しおがないから、しおがないと…（仕様がない）
タロウ　「ハハ…しゃれ？
ヒトシ　「いまのしゃれになってた？
タロウ　「うん、なってた…ぷっ。

ヒトシ　「ハハハ…しおがないからしおがない…ってか？
二人　「ギャハハハハハハハハハハ……ハーッハッハハハハハハハハハハハ。
タロウ　「ハハハ…じゃこれはこれは。
ヒトシ　「なになに？
タロウ　「塩分とりたいけど、高血圧でしおくえん…食塩……。
ヒトシ　「…しゃれてんね…。
タロウ　「ゲハハハハハハハハハハハハ。
ヒトシ　「じゃこれはこれは。
タロウ　「なになに。
ヒトシ　「おならがプーとでたプー。
タロウ　「…それ、しゃれ？…。
二人　「ドパハゲデゲデハハハハハハ…。
タロウ　「ハハハハ…わあ～。

タロウ周りみて

タロウ　「わ、ここにもここにも、ここにも、お、お、おお…うわー、ソリをひいた牛がいっぱいとんでらあ…。
ヒトシ　「…なんで？
タロウ　「ソリウシ…素粒子…。
ヒトシ　「…むつかしいな…。
二人　「ハーッハハハハハハハハハハハハハ。

馬鹿笑い

ヒトシ　「ハハハハハ、はは、八っつあん、八っつあん、ね、ね、八っつあん。

タロウ、ヒトシをじっとみて

タロウ　「…なんだい、熊さん…。
二人　「ケハハハハハハハハハハハ。
ヒトシ　「な、八っつあん、八っつあんは、この世でなにかこわいものあるかい？
タロウ　「べ、べらんめい…ぉ男八五郎此の世にこわいもんがあってたまるけい。
ヒトシ　「ないの？
タロウ　「…と…いいたいところだが。

ヒトシ　「ほうほう。
タロウ　「…ま、地震に雷、火事に洪水、津波に伝染病。毛虫蝿ゲジゲジナメクジ、イモリにヤモリ、キリキズスリキズ虫さされってとこがこわいな。
ヒトシ　「やけに多いね。
タロウ　「まだいい足りないやい、まいったか、ベラボーめ。
ヒトシ　「あきれたよ。
タロウ　「じゃ熊さんのこわいもんは何だい？
ヒトシ　「オレは…。

フッと上を向き

ヒトシ　「二階…がこわい。
タロウ　「二階？
ヒトシ　「二階にいるうしがこわい。
タロウ　「うし？…。
ヒトシ　「よだれたらしてねむってる、なかなか起きない、いつまでも起きない。
タロウ　「…。
ヒトシ　「いまもゆめみながらねむってる…。
タロウ　「え？…。
ヒトシ　「おれはそのうしのみているゆめがいちばんこわい…。
タロウ　「…どんな…ゆめ？…。
ヒトシ　「こんなゆめ…。

突如暗転、ザー(一瞬)…明るくなって ♪セミ♪　ヒトシ大声で

ヒトシ　「いらっしゃいませ。

タロウびくっと前を向き

タロウ　「ご、ごめんください。

しばしの間

タロウ　「…暑いですねえ…。
ヒトシ　「なつ…なんで…しょうねえ…。

二人　「…。

タロウ、露骨に首を伸ばして色々なトコロをながめて

タロウ　「…ここ…おみせやさん？
ヒトシ　「そうですよ、ウラシマさん。
タロウ　「…なにうってんです？
ヒトシ　「うってません。
タロウ　「へ？じゃなに？
ヒトシ　「（カウンタアの前面さして」ほらソコ…かいてある。
タロウ　「…で・こ・ぼ・こ・や？
ヒトシ　「ＮＯＮ ＮＯＮ…こう。

と字を並べかえる…占となる（図三）

タロウ　「うらない？

ヒトシ、スダレのような、算木を出して

ヒトシ　「納音、日付、曜日、干支、九星（二十四節気と雑節、選日、六輝）中段十二直、二十八星宿を鑑み、人の運勢、事の吉凶、将来の成り行きを予言する…易者です。

右より巨大な機関車が煙をあげて出てくる ♪ドドドドドド♪

ヒトシ　「絵にかいた汽車でもなければ、駅舎、ステイションでもありません。

又、ドッドッドドと逆戻りしていく（左の柵もなくなっている）

ヒトシ　「見料五重万円。

ヒトシ、手を出す。タロウ、スッと渡す

ヒトシ　「Ｍｉｎｄ大きに。
タロウ　「は。

ヒトシ　「氏名、生年月日を。
タロウ　「ウラシマタロウ、七四年…。
ヒトシ　「しょうわの？
タロウ　「そう、昭和七四年七月十五日生まれ。
ヒトシ　「かわいそうに…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「あなた、ロクなことありませんね。
タロウ　「は？
ヒトシ　「特に生年月日が良くない。
タロウ　「はあ…。
ヒトシ　「今からでも遅くない…変えなさい。
タロウ　「なにを？
ヒトシ　「生年月日。
タロウ　「かえるって…アンタ…。
ヒトシ　「でも、ま…かえてもかえなくても…あんまりかわりはないけどね…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「どうせセカイはもうすぐおわっちゃう。
タロウ　「…おわる？…。
ヒトシ　「おわります、とーとつに…。

ヒトシ、スダレのような算木をDNAのラセンの型のようにひねり、ゆっくり回している

タロウ　「…セカイが…おわる？…。
ヒトシ　「おわります…。
タロウ　「どんな…フウに？…。

暗転（照明、♪、役者紹介用）〈ザーーー〉

ヒトシ　「本日はどうもありがとうございました。
タロウ　「ありがとうございました。

二人礼をする、その途中でC・O。元にもどる

タロウ　「…どんなフウに…。
ヒトシ　「…知ってるくせに…。

タロウ　「…どんなフウ…。
ヒトシ　「あめは幾十日も降りつづき、かぜはいつはてることもなく吹きつづける。地盤は割れ、地軸はかたぶき、人心は乱れ、地上は火と水のうみ…。
タロウ　「…なんかよくきくはなしだね…。
ヒトシ　「よくきくはずです、だって…もうはじまっている…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「外じゃもうはじまってる。
タロウ　「そと？
タロウ　「ゆめのそと…
タロウ　「え！

二人サッと同時に耳を人指し指でふさぐ、と、大音響の風と雨と震動の音、光。三拍で指をはなす、またもとのまま

ヒトシ　「…ね、こわいでしょ。
タロウ　「…こ…こわかないよ…どうせ、ゆめだし。
ヒトシ　「ゆめ？
タロウ　「二階のうしのゆめなんだろ。
ヒトシ　「にかい…脳死…。

と、鼻に管をさす。

タロウ　「あ…くだ…。
ヒトシ　「おれのこと？にかいのうし。
タロウ　「…うし…くだん？…。
ヒトシ　「こんばんは…くだんです。
タロウ　「はは…やっぱこれゆめだね…。
ヒトシ　「なぜ。
タロウ　「くだんなんているわけないじゃない。
ヒトシ　「ハラッパでひろったんじゃ、なかったの？
タロウ　「あれ…うそ。
ヒトシ　「うそ？
タロウ　「ハラッパでひろったっての…うそ。
ヒトシ　「だって二階で飼ってるって…。
タロウ　「あれ…ヒトシくんを二階にさそう口実…。

ヒトシ　「…うそなの。

鼻の管はずす

タロウ　「うそ…くだんなんていないの。
ヒトシ　「じゃオレはなに？
タロウ　「なんでもいーじゃん、これどーせゆめなんだし。
ヒトシ　「ゆめ？
タロウ　「ゆめ。
ヒトシ　「…だれの？
タロウ　「だれ…って…おれ…でしょ…そりゃ。
ヒトシ　「じゃ…オレは？
タロウ　「…おれのみているゆめにでている人…だろ…。
ヒトシ　「ちがうよ。
タロウ　「どして？
ヒトシ　「これはオレがみているゆめだから…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「オレがみているゆめに…アンタがでてるんだ。
タロウ　「え？
ヒトシ　「もし、アンタがいまオレのでているゆめをみているんだとすれば、それはオレがみているゆめにでているアンタがみているゆめにオレがでているってことだな。
タロウ　「アンタ…オレ…アンタオレ…アンタオレ…。

ヒトリゴトのようにつぶやく

ヒトシ　「そしてそのオレがあんたのでているゆめをみている。
タロウ　「アンタ…オレ…アンタオレ…（ニョキッと穴から旧式のファンタオレンジがでる）アンタオレ…あ…アンタオレンジ…（なにげなくとり、ぐびぐびのみながら）じゃオレがいまみているのは？
ヒトシ　「オレのみている、ゆめ。
タロウ　「…つまり？
ヒトシ　「アンタの実体はない。
タロウ　「じょ、じょーだんじゃない。
ヒトシ　「じょうだんではない。

タロウ　「じゃオレってなに？
ヒトシ　「なんでもない。
タロウ　「なんでもないって？
ヒトシ　「アンタはオレのキオクの一部でしかないってこと。
タロウ　「オレが？…。
ヒトシ　「…そう…。
タロウ　「そんなわけない！！
ヒトシ　「じゃアンタ、ジブンのキオクがあるっての？
タロウ　「ありますよ。
ヒトシ　「ホント？
タロウ　「当然でしょ。
ヒトシ　「…去年のナツ、海水浴にいったね。
タロウ　「…ああ。
ヒトシ　「どうだった。

ザザーンという波の音

タロウ　「まぶしいね。
ヒトシ　「ああ。
タロウ　「まぶしいね。
ヒトシ　「ああ。
タロウ　「まぶしかったね。

突如♪〈潮風のメロディ〉、光変わる

ヒトシ　「はじめての海水浴はどうだった？

ザザーンという音

タロウ　「うみ…しお…かぜ…すな…なみ…なみがあんなにたかくてひがあんなにまぶしくてめがちかちかして。
ヒトシ　「うみうしふんだ？
タロウ　「いっぱいふんだ、なみけたてて、いっぱいしおのんだ…。
ヒトシ　「あつかった。
タロウ　「かぜないで、あせがでてのどかわいた。

ヒトシ　「しおかぜかいで。
タロウ　「貝であすんだ。
ヒトシ　「やまのぼったな。
タロウ　「きれいなはなや。
ヒトシ　「まきばで。
タロウ　「たくさんのうし。
ヒトシ　「ぞうきばやし。

セミの声

タロウ　「カブトやとった。
ヒトシ　「でっけじしん。

ジシンの音

タロウ　「まど、なった。
ヒトシ　「せんそうも。

ザーーー

タロウ　「いえがこわした。
ヒトシ　「つらかったなあ。
タロウ　「つらかないよ、へいちゃらよ。
ヒトシ　「疎開したし。
タロウ　「汽車でいった。

ケムリとともにドッドッと巨大な機関車でてくる〈窓にフラッシュバックものスゴイスピードのエイゾウ〉

ヒトシ　「ひとがいっぱい。
タロウ　「けむいも。
ヒトシ　「けむたなあ。
タロウ　「いっぱいせいた。
ヒトシ　「スゴイスピードだ。
タロウ　「いえやまちとんでく。

ヒトシ　「やまが。
タロウ　「つきが。
ヒトシ　「はやしが。
タロウ　「もりが。
ヒトシ　「ラジオ体操第二。

ラジオ体操第二

タロウ　「イチニイチニ。
ヒトシ　「あついな。
タロウ　「あせがでて、あせがでて、しおがない。
ヒトシ　「きんろーほーし。
タロウ　「くるしくてくるしくてたまりません。
ヒトシ　「しかられて。
タロウ　「どなられて。
ヒトシ　「ぐんじきょーれん。
タロウ　「あめのひ。
ヒトシ　「ぶんぶんふりまわされて。
タロウ　「あめがとんでるみたいにみえる。
ヒトシ　「どろだらけ。
タロウ　「いたい。
ヒトシ　「めにはいって。
タロウ　「あせがいたい。
ヒトシ　「ほめられたな。
タロウ　「しゅうじ！
ヒトシ　「やればできるんだ。
タロウ　「うれしくて、かけころんだよ。
ヒトシ　「うんどうじょう。
タロウ　「いぬひろった。
ヒトシ　「ハラッパで。
タロウ　「元気かな。
ヒトシ　「エンソク。
タロウ　「まえのひ。
ヒトシ　「メザマシかけたな。

ギリギリという音

ヒトシ　「あめだった。
タロウ　「さかみち。
ヒトシ　「じてんしゃんのって。
タロウ　「はやすぎてスゴイ！

キキキーっという音

ヒトシ　「あぶなかったなあ。
タロウ　「ひかれるとこだった。
ヒトシ　「スイカ。
タロウ　「ひとりでぜんぶたべた。
ヒトシ　「花火した。
タロウ　「ひとりで。
ヒトシ　「どぶにはまった。
タロウ　「ひとりで。
ヒトシ　「ひとりで。
タロウ　「海およいで。
ヒトシ　「波が出た。
タロウ　「ひとりで。
ヒトシ　「えいがみた。
タロウ　「なみだでた。
ヒトシ　「ひとりで。
タロウ　「ぜんぶ。
ヒトシ　「ひとりで。
タロウ　「ぜんぶ。
ヒトシ　「ぜんぶ。
タロウ　「ぜんぶ。
ヒトシ　「ゼンブ…これぜんぶオレのおもいでだ。
タロウ　「え？
ヒトシ　「みんなオレのキオク。

タロウ、スキッチ切って

タロウ　「…ちぇっ、やめたやめたこんなゆめ。

ヒトシ　「やめたいよはやく。
タロウ　「え？
ヒトシ　「おわりたいよ。

コメカミをギリギリと巻く、♪ギリギリギリ♪

ヒトシ　「メザマシのねじもスリキレタ…。
タロウ　「…。
ヒトシ　「おわってしまうのもこわいけどいつまでもおわらないのはもっとこわい。

ジジジジジ

タロウ　「どういうこと？
二人　「大脳皮質運動停止。呼吸器、循環器等脳幹部正常機能。依って植物的状態。件の如し。

鼻の管をひっぱると一瞬先っぽにテンテキの一式がみえる

タロウ　「なんだ？！

ザザザザーー

ヒトシ　「かえらなきゃ…はやくかえらなきゃ。
タロウ　「かえる？
ヒトシ　「そとはものすごいスピードだ。
タロウ　「そと？

翅のはえた黒子がカウンタアを片付けはじめる

ヒトシ　「ゆめのそと…。
タロウ　「（ふりむき）あ…。

♪逆回転の音♪　窓の外がスゴイスピードで流れている

ヒトシ　「もうすぐだ。

タロウ　「もうすぐ？
ヒトシ　「かえんなきゃ、はやくかえんなきゃ…まにあわない…。
タロウ　「なに？
ヒトシ　「おしまいに…まにあわない…。
タロウ　「おしまい？
ヒトシ　「……おしまい。

突如暴風雨、時計の音等、光なくなる

タロウ　「…ど、どういうこと？
ヒトシ　「もうすぐ…もうすぐだ…。
タロウ　「もうすぐ…。
ヒトシ　「もうすぐ。
タロウ　「もうすぐ。
ヒトシ　「もうすぐ…。

大音響の中、暗転

4

暴風雨の音、時計の音、救急車、踏切の音等の洪水の中

ヒトシ　「ウラシマさん……ウラシマさん…。

♪チリリーン♪

パッと明るくなる。と、先程のカウンタアの柵はなく、スダレのかかった田舎風の二階座敷である。中央にフトンが敷いてあり、タロウが寝ている。カナカナの音、遠くから潮騒の音、盆踊りの音、かすかに階下でTV(シャボン玉ホリデー)を聴いている音がきこえる。脇にピザがある。タロウ、ガバと起き上がり

タロウ　「あ、こ…こ…は？…。

あたりを見回す。と障子をあけて、ヒトシ、お盆にファンタオレンジを載せて入ってくる

ヒトシ　「…あ…め…さめました？
タロウ　「…あ…は…？
ヒトシ　「日射病ですか？…あどうぞ…。

と、ファンタをタロウに差し出す

タロウ　「あ…どうも…。
ヒトシ　「家の前で倒れられてるのを運んだんですよ。
タロウ　「…あ…それは…ホントに…どうも…。
ヒトシ　「お加減は？
タロウ　「あ…は…あ、もう…ヨイショと…大丈夫…です…。

タロウ、立ち上がる

ヒトシ　「それはよかった。
タロウ　「本当、お世話おかけしました。
ヒトシ　「暑いですから…気をつけないと…。
タロウ　「…はあ…。

ヒトシ、窓辺に行き、スダレを上げて扉開ける。カゼ、フーリン、外の潮騒の音、盆踊りの音、入ってくる

ヒトシ　「…ほら…いいカゼが入ってきますよ。

タロウも窓辺に行き

タロウ　「…ふあ～…きもち…いい…。（外をみて）…うみがちかいですね…。

ウナギの蒲焼きの匂いがしてくる

ヒトシ　「夕日がキレイでしょう。
タロウ　「しずかな…うみだ…。
ヒトシ　「うなぎ。

タロウ　「え？
ヒトシ　「ゆ・うなぎ…ですよ…。
タロウ　「…あ…夕凪…。
ヒトシ　「…キモチのよい夕方です。
タロウ　「よいながめ…ですね…。
ヒトシ　「なにがみえます？
タロウ　「海岸沿いに白い道…コドモたちがはしゃいであるいてますよ。
ヒトシ　「それから？
タロウ　「エゾまつ？のはやし…壮観ですね…。
ヒトシ　「それから…。
タロウ　「いろんないえのやね…夕日にキラキラひかってます…。
ヒトシ　「めが…いいんですね…。

シャボン玉ホリデーのテーマソングがきこえてくる

タロウ　「…あ…シャボン玉…ホリデー？…。
ヒトシ　「もう…六時…半…ですか…。
タロウ　「…なつかしい…なあ…。
ヒトシ　「…おわっちゃいましたね…。
タロウ　「え…あ、シャボン玉ホリデー…？…。
ヒトシ　「いえ…セカイ…。
タロウ　「あ。

裸電球、虫の音♪〈遠い町の銀〉。

ヒトシ　「…ウラシマさん…。
タロウ　「…は？…。
ヒトシ　「さんじゅう…ごねんぶり…ですね…。
タロウ　「え？
ヒトシ　「おひさしぶり…。
タロウ　「な、なに？
ヒトシ　「さんじゅうごねんも…そのフトンで…。
タロウ　「なんです？
ヒトシ　「ねているあいだ…そとではいろいろありました。
タロウ　「え…。

ヒトシ　「でも…もう…なんにもない…。
タロウ　「どういうこと…。
ヒトシ　「さめたら…なんにもない…なんて…あんまりですよね…。
タロウ　「どういうことです。
ヒトシ　「なんにもない…って…ことです…。

タロウ、窓辺にいき、外をのぞき

タロウ　「ほら…うみ…はやし…いえ…そら、みち…やね…やね…やね…。
ヒトシ　「ほんとに…みえるんですか？…。
タロウ　「ほら、まど、まどだ。
ヒトシ　「はい…むかし…そこにはまどがありました。
タロウ　「ほら、柱…。
ヒトシ　「むかし…そこにははしらがありました。
タロウ　「…ほら、でんきゅう…(パチッと蚊をつぶし)ほら、蚊だ。
ヒトシ　「…むかし…そこいらじゅうに…それはもういろいろなものが…ありました…。
タロウ　「いまでも…あるだろ。
ヒトシ　「ありません。
タロウ　「あるよ。
ヒトシ　「ありません。
タロウ　「…どういうこと？…。
ヒトシ　「どういうことでしょう。
二人　「…あんた一体だれ？
タロウ　「だ…だれ…って…アタシは…アタシだ。
ヒトシ　「…むかし…アタシもありました…。
タロウ　「…むかし…って…。
ヒトシ　「…それはもう…ゆめのようなむかし…。

セロテープを出しびびと

タロウ　「ゆめ…またゆめ…またゆめかよ…ゆめゆめゆめ…いいかげんもうゆめはうんざりだ。
ヒトシ　「…ゆめじゃありませんよ。
タロウ　「え？
ヒトシ　「…もうゆめも(セロテープを伸ばすと、もう残りはなくスカッと切れる)…おわ

りです。

大音響のタンゴ、「ゆめ」と無数に書いてある幕落ちる、「ゆめ」の幕に同ポジ、スタッフのタイトルロール、〈劇終〉。幕の裏ではセカイがおわる

8

フッと寂しい灯りに浮かびあがる二人

タロウ　「…ヘンなユメみた…。
ヒトシ　「…どんな。
タロウ　「…ユメのおわる…ユメ…。
ヒトシ　「…ヘンなの…。

と、♪〈スターダスト〉、スウとまわり、あかるくなる。そこには劇中配達されたピザと、配達されなかったファンタオレンジ以外はなにもない。二人あたりを見回し、もう一つ外の世界にユックリにじみ、きえる

（一九九五年七月脱稿）